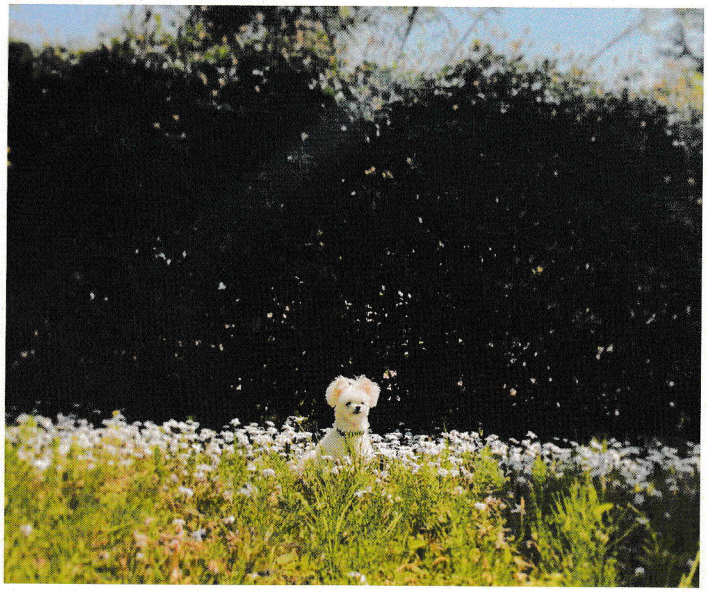
映画『だって しょうがない じゃない』

ニューロ・ダイバーシティ・マガジン　vol.1



新型コロナウイルス感染症に関する緊急事態宣言の延長をうけ、タバコを吸う量が増えてしまった。コロナの渦中、要介護ステージ4の祖母(96歳)の自宅介護に追われた父親(70歳)が狭心症のカテーテル手術をし、無事退院後に今度は母親(72歳)が脳梗塞で倒れて緊急入院となった。 未曾有の事態と我が家の高齢化による緊急事態が二重の螺旋となり、その混乱した渦の中で、なんとか正気を保とうとして控えるべきタバコを吸う量がコロナ以前よりも逆に増えてしまった。リハビリ入院となった母親とは院内感染防止対策の為、面会することも出来ずLINEのみが連絡手段となり、母親の病状がなかなか把握できず、後遺症の悪化等の不安を妄想してしまう。 都内で気ままに暮らしていた妹(42歳)は、 母不在の横浜の実家に生活ベースを移し、最寄りに暮らす僕(44歳)も週末は実家に泊まる生活に変わった。 ソーシャルディスタンスが提唱される中、コロナ以前に遠ざかっていた家族の距離は密になり、時折テンパって口論するなどのやりきれない雰囲気が家庭内に立ち込める事もあるが、ぽっかりと空いた母不在の隙間を埋める家族間のなにげない日常会話を有り難く感じた、互いに笑い合う時間がより大切なものだと再認識した。愛犬のマル子は、散歩の機会が増えて、生き生きしている。平均寿命が80歳を超え、世界一の長寿大国となった日本の現実。 自分の両親のように自らの老後を親の延命に捧げた結果、身を滅ぼしてしまう人々が後を絶たないという。今は親が自分より長生きするかもしれないという不自然さ、自然界の摂理と医療化された人間界の営みに不具合が生じてバグっているように思える。かつて誰も経験したことのない超高齢化の時代。アフターコロナ、ポストコロナの世界は新しい時代に突入したとされ「コロナ後のニューノーマル」と説かれるようになった。今後の日本のエンターテイメントにおけるアップデート、より包括的な創造を考えたい。

映画「だってしょうがないじゃない」は、劇場公開や上映イベントは延期や中止となり「仮設の映画館」にてオンライン配信の上映機会を得た。第2波が訪れる不安の中、先の見えない未来に一筋の光を願う。先日の緊急事態解除の宣言をうけ、コロナ渦中をどう過ごしたか?まことさんに直接お話を伺いたく、会いに行きました。

「だってしょうがないじゃない」監督 坪田義史

坪田 監督 と 稲葉俊郎 さん

稲葉俊郎(いなば・としろう)

医師、医学博士。1979年熊本生まれ。
軽井沢病院総合診療科医長、信州大学社会基盤研究所特任准教授、東京大学先端科学技術研究センター客員研究員、東北芸術工科大学客員教授を兼任(山形ビエンナーレ2020 芸術監督 就任)
単著『いのちを呼びさますもの』(アノニマ・スタジオ)など。
HP:https://www.toshiroinaba.com/

稲葉 「この映画を観ながら感じたことなんですけどね。 そもそも「ドキュメンタリーのTV」とね「ドキュメンタリー映画」との違いって何なんだろうということなんです。TVでドキュメンタリーものを見ることもあるわけですが、映画館で映画として見ることの必然性ってなんだろう、ということです。そこで大事なことは「時間」ということなんじゃないかな、と思ったんですよね。例えばTVで見るドキュメンタリー番組では、要らないと思われる部分をどんどんカットして編集して、なるべくコンパクトに簡潔に伝える、 という手法になると思うんですよね。ただ、映画に関しては「間(ま)」のようなもの、つまり、一見意味が無そうな「時間」が入り込んで流れていることがかなり重要なところで、それは映画館という特殊な空間で観ることとも関係してくると思うんですよね。 具体的に言えば、現代が失った儀式のようなものです。儀式では、とにかく「時間」が大切なんですよ。おそらく、人間の頭ではなく心や体に物事が収まっていくには、ある一定の「時間」が必要だということでもあると思うんです。現代社会では、 そうした「時間」というものが失われていて、短時間でコンパクトに、1分で何かを理解しましょうとか、そういうものばかりだと思うんですよね。クイズ番組なんかもそうですけど、時間内で解ける問題をいかに速く解くか、という形式は前提となって疑うことすらなくなってしまう。 たとえば、これは2時間じゃなくて10分に短縮できるだろう、として、2時間の内容が10分に圧縮される。現代がそういうスピード重視の中で、得るものと失うものがあって、「時間」が絶対的に必要なことってあると思うんです。喪に服すとか、悲しみを受け入れるとか、それはすべて時間です。儀式も時間がかかる事自体が大事なんですよね。
心の中に物事が収まっていく、というのはそれだけ「時間がかかる」事なんだと思うんです。儀式が失われると、儀式の意味って何なのか、そもそもよくわからなくなってしまいますから。

坪田 「儀式という言葉になるほどと思いました」

稲葉 「この映画を観ていたら触発されるものがありました。植物的な生き方をしている人にとっては、桜の木がコンクリートで埋め尽くされたとか、自然が壊されて埋め尽くされてしまう環境は、本当に生きづらいだろう社会なんだろうなと思いました。窒息して息ができないような気がするんじゃないですかね。 そういう時代だからこそ、アーティストのような存在が、別の生き方、別の生き様、別の世界のようなものを政治とは別の文脈で提示する役割があるんだと思うんですよね。 それは、遊びと仕事と儀式とが円環構造でつながるような生きざまです。映画の後半のシーンでも、まるで神道の儀式を見ている様な感覚があったんですよね。本当は見ることができない神社の奥、幕の内側で神官が行なっている儀式を覗いたような感覚が残りました。 自分は映画を見た後に書いた文章は、『発達障害とされる人たちは、ゆっくりゆっくりと自分のペースで発達する人たちだ。 慌ただしいスピード社会からはじき飛ばされて困っている。植物は引っ張っても伸びない。サンサンと照る太陽の光と、適量な水と、根を張る大地とが必要なだけだ。植物原理で生きる人たちも、光と水と土地を求めている。 儀式のような日々の暮らしは、社会の歪みのバランスをとる神事のように見えた。 わたしたちはその神事に参加できているだろうか』というものですが、「植物」「時間」「儀式」という言葉が映画を見ていたら自然に浮かんできたんですよね。」

稲葉 「発達障害の人たちへの医学的な対応を見ていても、 正直、余計な事をやりすぎて言いすぎているんじゃないか?と思うんですよね。こうするべきとか、こうあるべきとか、ある意味では余計なお世話じゃないのかなぁ、と。 医療においてもそうですが、何かをすることよりも、何かをしないこと、待つことの方がエネルギーを使うんですよ。だから何かしたい、何か言いたい、となりやすいのですが、それは医療者にとっても楽なんですよね。待つことの方が力がいるんです。人間は、本当は宇宙と一対一で対峙して生まれてきている存在だと思うんですよね。宇宙や自然と一対一で対峙する人間、というスタンスをもっと尊重するべきだと思うんです。 何かができる、できない、という見方は一面的なんですよね。周りがあの人はこれもできない、あれもできないとワーワー騒いで、 無理やりこちらの都合で管理していくという発想は、自分も医療者として耐えられないものがありますね。 押さえつける、管理する、という発想ではなくて、あちら側へ伸びたいのであれば、あちら側へ伸びていく環境を整える。邪魔をせず見守る、という発想は医学でも教育でも、わたしたちの人間関係の基礎にあるシンプルな原理だと思うんです。それで十分だと思うんですよ。」

坪田 「均一化しようとする社会の流れがありますね(子供に対しての)発達という視点でいうと、できない事を肯定したいというか、だからこれが出来るんだというか」

稲葉　「そうそう、映画へのコメントでも書いたことと関連しますが、植物の生き方は、適切な土地と水と光があれば、それ相応に育っていくと思うんですね。肥やしをやり過ぎてもダメで、肥やしはすこし離して置いてあるくらいがちょうどよかったりする。動物と植物、育ち方はまるで違います。そうした節度、相手への敬意、そうしたことが大事だと思います。そして、誰しも「居場所」は大事なんですね。植物でも動物でも人間でも、居場所がないと育っていかないわけですよね。それぞれの居場所を尊重する。今、居場所を奪っている光景をよく見ますよね。居場所という観点から、もう少し人間の生命のあり方、生き方を捉えなおしていく必要がありますよね。それは社会の生命にもつながりますが。」

坪田　「発達障害の概念が生まれたのが2000年前半くらいからの最近の話だとして、僕が中学時代とかそういった概念はなかった訳であって、僕が中学時代に発達障害の概念があったら、薬を処方されたのか?と思ってしまうんですね、そしたらどんな人格になっていたのか?とか」

稲葉　「その時、坪田さんはどういうことに困っていたんですか?」

坪田　「中学生の時は、部活を引退して受験の時に、急激に感情の起伏が激しくなり、体と心のバランスが悪くなり、毎日泣いていましたね、家で一人パニックになってました」

稲葉　「それは別に泣きたいときは泣けばいいんですよ、それを変に止めちゃうとね、よく無いですよね。感情の流れというのは自然なものですから、せき止めた方が何か不自然なことが起きますよ。子どもの世代に薬を投与するのか?という問題に関しては、まず一番の基本は、その子が何に困っているのか、ということを常にちゃんと見据えながらやった方がいいと僕は思います。本人が困っていることをちゃんと聞きだすことより、勝手に周りが困っている事にすり替えていることがすごく多いんですよね。困っているのは誰なんですか、ということです。周りが困っているから薬を投与して解決する、というのは発想の根本が間違っている気がしますね。本当によく混同していると思いますよ。」

坪田　「SOSみたいな気持ちがあったと思います。なんかそこからアート、表現に目覚めていったっていうことでもあります」

稲葉　「そういう感情が流れていく回路って必ずどこかにあるんですよね。それこそが居場所につながっていくんですよね。この世界って全体としてはうまくできていて、あなたの心や体が向かった先が居場所なのかもしれない、と、周りが親身になってサポートできれば、それで良いんですよね。大抵は、こちらの価値観の押し付けです。この人の居場所はどこだろうか、と共に見つけていくことが周囲の役割だと思いますよね。」

坪田　「そうですね、居場所。。この映画でも施設なのか自立なのか?という揺れる気持ちがあって、けどそれはマコトさんの意思決定、意思尊重をどこまで聴けているのか?あとは経済的な事で出来る出来ない現実があったり、マコトさん自身、周りが安心したいのか、マコトさんが安心したいのか?」

稲葉　「そこは常に混同されやすいんですよね。これは自分の問題か、それとも周りの問題なのか。そこを間違えると、当事者ひとりが取り残されます。映画でも、そうした優しい眼差しを感じながら拝見しました。」

2019.11.6@ポレポレ東中野 上映後トーク